

財団法人 防長教育会編集・発行「防長教育会百四十年史」2024年10月5日刊を読む

防長教育会百四十年史、発刊のことば

防長教育会 理事長 野村邦武

1. (1)国の教学体制の優劣が国の栄枯盛衰を左右することが多いのは、歴史の示すところです。  
(2)国が栄えるには、優れた教学体制を整え、教育と学問を深く涵養することが大切だと申せます。  
(3)これは国だけでなく、県についても言えることでありましょう。
2. (1)顧みて山口県は、幕末の各藩との緊迫した相剋や外国艦隊の襲撃など幾多の苦難を乗り越え、敢然と明治維新を主導しました。  
(2)この誇るべき実績は、幾世紀もかけて培った防長教学の賜物であったと申せます。  
(3)源流が遠く大内文化に遡る優れた防長教学は、江戸時代に普及した毛利藩の藩校や郷校・私塾を通じて、藩内にしっかり根を下ろしておりました。
3. (1)しかし、藩の総力を挙げて明治維新を先導した過程で、毛利藩は人材や財力を著しく消耗し、防長教育会が発足する頃には、かつての教学体制は疲弊し切っておりました。  
(2)これを憂えた旧藩主毛利元徳は外務卿の井上馨らと諮り、明治十七年(1884年)に防長教育会の設立を決意し、防長教学、殊に中学校経営の復興のための寄付を広く募りました。  
(3)この呼びかけには、多くの有志が共鳴してたちまち巨額の資金が寄せられ、同年十月に防長教育会が発足しました。今年は丁度その百四十周年目に当たります。
4. (1)防長教育会は、発足して直ちに県が新設した中学五校の経営の立て直しを始め、二年後には東京と京都の官立高等中学校に続く全国で三番目の山口高等学校を設立して、自ら経営しました。  
(2)このように他県に先駆けて民間法人が中等教育経営の中核的な役割を担った原動力は、往時の優れた防長教学の再興を期する、先輩有志の烈々たる志でした。  
(3)やがて防長教育会は、軌道に乗せた中学校や高等中学校の経営を県や国に順次移管して、明治三十八年(1905)からは、育英奨学事業による防長子弟の育成支援が、主たる事業となりました。
5. (1)この奨学事業は、幾多の消長を越えて鋭意継続され、既に世に送り出した約二千六百名もの逸材は、日本の各界で多大な貢献を果たしています。  
(2)防長教育会の百四十年の歴史を顧みますと、郷土の後輩の育成のために誠心誠意で奉仕してこられた多くの先輩のご尽力が心を打ちます。

(3)私共もこれらの諸先輩の志をしっかり受け継いで、当会運営の更なる充実を期したいと念願しています。

令和六年(2024)十月

<コメント>

(1)「郷土に誇りを持ち、世界へはばたく人づくり」

(2)「志を立てて様々な困難に立ち向かいながら、日本の近代化・産業化に大きな貢献を果たした郷土の先生たちがそうであったように、次代を担う子供や若者たちが、あまねく学びを通して、ふるさと山口への誇りと愛着、高い志を育み、その持てる能力を最大限に発揮して行動できるよう…。」(村岡嗣政・山口県知事)

(3)明治維新、明治政府を支えた山口県の志の高い人材づくりは、大正、昭和、平成、令和と脈々と息付いています。そのエネルギーの一つが防長教育会だと確信します。素晴らしい活動です。大いに学びましょう。

2025年1月20日(月)